

# AIを公共善につなげるために



森 健

## AIの進化に関する4つのキーワード

2025年12月、野村総合研究所（NRI）は、世界的な思想家で、雑誌『WIRED』の創刊エグゼクティブディレクターであるケヴィン・ケリー氏を招へいし、AIの未来について議論する場をいただいた。その中でケリー氏は、2030年までのAIの進化に関するキーワードとして、①シンボリック推論、②空間、③感情、④エージェント、の4つを挙げている。

### (1) シンボリック推論

シンボリック推論とは、記号やルールを用いて論理的に考えるAI開発アプローチで、昔の技術なのだがここにきて再び注目されている。ChatGPTなどの生成AIを生み出した大規模言語モデル（LLM）がここまで大きな成果を出してきたものの、その限界も見えてきたからである。そのため、LLMのパターン認識能力と、シンボリックAIの論理的推論能力という強みを統合し、AIの性能をさらに高めようというニューロシンボリックAIというアプローチなどが登場している。

### (2) 空間

空間AI、あるいは空間インテリジェンスという概念がある。これは、地理空間データをAIで解析して価値を生み出す技術で、スマートグラスや自動運転車などが分かりやすい例だ。

空間AIは大きく3つのAIから構成される。1つ目は移動する主体上のAIで、人間が装着するスマートグラスや自動運転車が搭載するAIなどが該当する。2つ目は特定のエリアに固定されているAIで、道路に設置されたAI搭載カメラなどがその例である。そして3つ目が、それらAI同士の連携を行うオーケストレーションAIである。

自動運転でいうと、自動車に搭載したAIが周囲の画像データを収集・分析するだけでなく、オーケストレーションAIを介して、道路に設置されているAIカメラとデータを連携しながら自動運転機能を提供するイメージだ。

### (3) 感情

3つ目のキーワードは感情である。注意すべきは、AIが進化し感情を持つようになる

といているのではなく、AIに接する人間にとって、より一層、AIが感情を持っているように感じるということである。

AIにも人間のような感情があるかのように錯覚する現象は、「イライザ効果」という呼び名で知られている（当時開発されていたおしゃべりロボット「ELIZA」に由来）。AIおよびロボット技術の進化は、人間の錯覚をさらに拡大していくだろう。たとえば、エンジニアード・アーツ社が開発したAIロボット「Ameca」は、表情やジェスチャー表現が豊かで、長時間会話をしたら、感情を持っていると多くの人が思うのではないだろうか。カズオ・イシグロの小説『クララとお日さま』では、子供たちが、自分のAF（アーティフィシャル・フレンド）と感情的な絆を構築する世界が描かれているが<sup>注1</sup>、これは遠くない未来像なのかもしれない。

#### （4）エージェント

2025年が「AIエージェント元年」と呼ばれているように、4つ目のキーワードであるエージェントについては、テクノロジー各社が相次いでサービス提供を開始した。

現時点では企業向けAIエージェントが大半だが、いずれは消費者向けAIエージェントも浸透していくだろう。Amazonが2025年に提供し始めたBuy for meは、消費者向けAIエージェントの先行例である。

消費者向けAIエージェントの提供については、テクノロジー企業以外にも大きなビジネスチャンスがあるだろう。消費者がテクノロジー企業の提供するエージェントを完全に信頼するとは考えにくいからである。そのAIエージェントが推奨する商品は、本当に

私のことを考えたものなのか、そうではなく特定の企業やECサイトの利益を考えているのではないか、という疑念が常に湧くからである。その意味では、技術力の高さよりも消費者からの信頼が厚いことがより重要で、そのような企業・組織にAIエージェント提供のチャンスがあるといえるだろう。

このようなAIの技術トレンドがある中で、本特集においても、第一論考「AIの汎用技術への進化と3つの波」では、AIがどのように汎用技術化していくのかの道筋を論じている。汎用技術とは、電気やインターネットのように、多くの領域で使われ、公共財的な要素が強い技術を指す。AIが汎用技術になっていくとは、AIが公共性を強めていくことにほかならない。

#### 大きな物語と小さな物語

生成AIの登場は大きな衝撃を社会に与えたが、その衝撃の一つが「物語の生成」である。NRIの石綿昌平が述べているように「物語は人間だけのものであったのに、これを人間以外のものが人間の言葉で語り始めた」<sup>注2</sup>のである。

ではAIはどのような物語を語り始めるのだろうか。企業目線で考えれば、自社のMVV（ミッション・ビジョン・バリュー）や、自社商品がどのような価値を提供しようとしているのかについて、潜在顧客とのコミュニケーションを支援してくれるだろう。

政府や行政目線で見ても、AIを活用することで、国民とのコミュニケーションが進む可能性はある。国民にとって分かりづらい政策をかみ砕いて説明することや、ある政策の

もたらず副作用などについてAIが事細かく解説するといった活用例である（その解説の正しさについては別途検証が必要だとしても）。

個人レベルでも、AIを使った物語の生成は容易になっている。AIを活用した小説の執筆や、過去のSNS投稿履歴をAIに分析させることで、個人でも手軽に自伝を制作できるツールが登場している。

このように、AIによる物語生成力は各所で発揮され始めているが懸念点もある。社会を混乱に陥れることを目的にしたフェイクニュースが生成されてしまうことや、AIが導入されたところでしょせんは声の大きい人の物語だけが聞こえてくるのではないか、といったものである。

英文学者の小川公代は、『ケアの物語』（2025）の中で「大きな物語」「小さな物語」という概念を紹介している<sup>33</sup>。大きな物語は正義の物語であり、聞き手を論破、説得しようとするのに対して、小さな物語はケアの物語で、聞き手との対話を推進しようとする。国際紛争の中で、それぞれの紛争国が発する声明が「大きな物語」、紛争の犠牲者の声を集めたものが「小さな物語」である。

AIという物語生成ツールによって、強者が自分の正しさを押しつけようとする「大きな物語」がさらに勢いを増すことは想像に難くない。そうではなく、AIによって「小さな物語」を生成、増幅する試みを意図的に進めることが公共善の視点からは重要である。

第二論考「AIが浸透した時代の行政サービスとは」では、市民のニーズを先回りする「アンビエントAI」といった概念を提唱しているが、こと行政サービスにおいては、声を

出したくても出せない人々のニーズをいかに可視化するか、AIを用いて「小さな物語」を生成するという視点が重要であろう。

### 楽観と悲観のはざままで

社会に対するAIの影響についてどう思うかについて、「AIブーマー」と「AIドゥーマー」と呼ばれる人々がいる。AIブーマーとは、AIを救世主として捉えている人々で、楽観／悲観軸で見たときの、楽観主義の極みのような人々である。AIのインパクトに対してとてもポジティブで、AIによって人々の生活は豊かになり、経済もより成長すると考える人々である。

それに対して、AIドゥーマーとは、AIの影響に対して極度に悲観的な思想を持つ人々で（破滅を意味するdoomからきている言葉）、典型的には、AIの進化によって人類の存続が危うくなると考えている。ではどういふ人々がブーマーやドゥーマーなのだろうか。ここまで極端ではないが、AIに対する楽観派／悲観派にどのような人がいるのかについては、NRIが実施したアンケート調査が参考になる。

第三論考「日・米・中・独4カ国調査に見るAI利用の受容性と日本におけるAI浸透の未来像」では、NRIが2025年9月に世界4カ国で実施したアンケート調査の結果を報告している。このアンケート結果を見ると、AIの利用頻度が高い人ほど楽観派の比率が高い傾向にある一方で、AIを使ったことがない人には悲観派が多くなる。その意味では、AIを何かの機会を使い始めると徐々に楽観的になっていくのかもしれないが、AIのゴッドファーザーと呼ばれるジェフリー・ヒン

トン氏（2024年ノーベル物理学賞受賞）のように、世界を代表するAI専門家の中にも、AIが及ぼす影響について悲観的な見方をする人もおり、AIのことを知り尽くす先にもAIドゥーマーへの道があるのかもしれない。

AIブーマーやAIドゥーマーとは異なり、状況を冷静に見ている人々もいる。筆者はそれを「AIソーパー（AIしらふ）」と呼んでいる。楽観／悲観軸でいうとほぼ真ん中だがやや悲観寄り、という人々である。AIソーパーは、足元のAIにまつわる事象をバブル、もしくはただの喧騒と考えている。AIには人類を滅亡させる力もないし、すべての社会課題を解決する力もない。AIにはそこまで力がないという見方である。

AIソーパーは冷静な視点で物事を見ようとしているという点で、社会にとって重要な存在ではあるが、私はこの立場が最適とは考えていない。分析的だが創造的ではないからだ。それに対してわれわれが取べきスタンスは何かといわれれば、これもケヴィン・ケリー氏が提唱している「プロトピア」的なスタンスだと思う。よってこのスタンスに立つ人を「AIプロトピアン」と呼びたい。この

言葉はケリー氏の造語であるが、楽観／悲観軸でいうとほぼ真ん中だがやや楽観寄り、というスタンスである。新技術は課題も生み出すが、それ以上に課題解決や人々の生活を豊かにする力がある。社会は漸進的だがよくなっていくという思想である。

狭い道筋かもしれないが、AIによって公共善を高めることは可能である。その道を進むには、単純な楽観論でも悲観論でもないプロトピア的なスタンスと、声なき声を愚直に紡いだ「小さな物語」にスポットライトを当てる意図的な取り組みが必要になろう。

---

#### 注

- 1 カズオ・イシグロ『クララとお日さま』早川書房、2021年
- 2 石綿昌平「DXからAI Empowered Growthへ」『知的資産創造』2025年9月号
- 3 小川公代『ケアの物語』岩波新書、2025年

---

#### 著者

森 健（もりたけし）  
野村総合研究所（NRI）未来社会・経済研究室長  
専門は技術と経済社会の相互依存関係の研究